

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02449

研究課題名（和文）1930年代の満州国における日韓交流史の研究 - 移民 と 民族協和 -

研究課題名（英文）A Study of the History of Japan-Korea Exchanges in Manchukuo in the 1930s:
<Immigration> and <Ethnic Harmony>

研究代表者

奥田 浩司（OKUDA, KOJI）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：90185538

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：満州国の建国以降、多くの朝鮮人が満州国に移住する。植民地朝鮮から満州国への移住は、日本、植民地朝鮮、満州それぞれの統治主体の思惑にしたがって遂行される。本研究は、統治主体の複雑な関係性の中で、朝鮮人移民が、どのような状況下に置かれ、どのように移住し生活したのか、という観点から調査研究を進めた。中国で暮らす朝鮮人の高齢日本語話者へのインタビューを基に進められた。研究では、得られたインタビュー記録を基に、同時代史料を収集し、朝鮮人移民の実際の生活について考察を加えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、主として、一人の朝鮮人の高齢日本語話者のインタビュー記録に焦点を当てて行われた。インタビュー記録を基に、同時代史料を参照しつつ、朝鮮人移民の日常について考察を加えた。結果的に、本研究はアラン・コルバン『記録を残さなかった男の歴史』に近接することになった。言わば大枠の歴史的事象ではなく、朝鮮人移民の日常を明るみ出すことで、これまでの朝鮮人移民の研究に新たな視角から知見を加えたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：After the founding of Manchukuo, many Koreans immigrated to Manchukuo. Emigration from colonial Korea to Manchukuo was carried out according to the intentions of the governing bodies of Japan, colonial Korea, and Manchuria. In this research, I proceeded with research from the perspective of what kind of situation Korean immigrants were placed in, and how they migrated and lived in the complicated relationship of the governing body. It was based on interviews with elderly Japanese-speaking Koreans living in China. What we were able to confirm during the interviews was that the interviewer and the interviewee built a dialogue relationship. The interviewee's memory is derived through interaction with the interviewer. In the research, based on the interview records obtained, I collected historical materials from the same period and added considerations to the actual lives of Korean immigrants.

研究分野：日本近現代文学

キーワード：満州国 朝鮮人移民

1. 研究開始当初の背景

植民地朝鮮にかかわり、朝鮮人留学生によって発行されていた雑誌、朝鮮人によって設立・運営された図書館などについて調査研究を行った。研究を進める過程で、朝鮮人知識人が満州国に移住し、活動していた状況を視野に収める必要性が生じた。そのため満州国における朝鮮人移民の状況について調査研究を行い、その実態について調査研究を進めた。

2. 研究の目的

満州国における朝鮮人移住者の実態について、調査研究を行った。具体的には、植民地朝鮮においてどのような状況下に置かれ、どのようにして満州国に移動したのか。そして朝鮮人は、満州国でどのように暮らしていたのか、という観点から調査を行った。

3. 研究の方法

満州国において幼少期を過ごした朝鮮人の高齢日本語話者へインタビューを行い、インタビューから得られた情報を基に、同時代状況について調査研究を行った。コロナ禍の影響により、研究を進める過程で、中国での調査ができなくなった。そのため研究開始の当初に得られたインタビュー記録について、同時代資料を参照しつつ、実態の解明を行った。

4. 研究成果

研究成果については、大きく次の4点に分けることができる。

- (1) 高齢日本語話者にインタビューを行うことの意義及び留意点について考察した。
- (2) 朝鮮人は植民地朝鮮でどのような状況下に置かれていたのか、という点について調査研究した。
- (3) 朝鮮人は植民地朝鮮においてどのような教育を受け、移住先の満州国ではどのような教育を受けたのか、という点について調査研究した。
- (4) 朝鮮人は満州国でどのような暮らしを行っていたのか、という点について調査研究した。

上記の順番に従って、以下に詳述する。

(1) 高齢日本語話者にインタビューを行うことの意義及び留意点について

本研究は、高齢日本語話者へのインタビュー記録を基に調査報告を行った。インタビューをした際に、気づいた点について述べておきたい。「満州国」及び旧植民地における高齢日本語話者へのインタビュー(1) 日本語・日本文化の記憶に関する報告」(『愛知教育大学大学院国語研究』第27号、2019年月)において報告した内容の一部を記す。

本研究におけるインタビューの目的は、満州国における日本語・日本文化との接触に関する事が主眼であり、過去の歴史的事実を掘り下げる意図は持ち合わせていなかった。しかしインフォーマントとの対話を通して、インタビュアーは否応なく「日本人」であることを自覚し、インタビューは予定されていた質問内容から大きく逸脱していくことになった。このようなインタビュアーの経験については、ライフヒストリー研究に述べられるところの「対話的構築主義アプローチ」が参考になるのではないだろうか。

桜井厚『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』(2002)では、「対話構築主義アプローチ」について次のように述べている。

語り手はインタビューの場で語りを生産する演技者であって、十分に聴衆(インタビュアー、世間など)を意識している。たんなる情報提供者(インフォーマント)ではないのである。その意味で、語りは過去の出来事や語り手の経験したことというより、インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的混合体にほかならない。とりわけ、語ることは、過去の出来事や経験が何であるかを述べること以上に「いま・ここ」を語り手とインタビュアーの双方の「主体」が生きていることである、という視点は、対話的構築主義アプローチにおいては基本的なことである。インタビューの場こそが、ライフストーリーを構築する文化的営為の場なのである。

本研究はライフストーリー研究を前提としたものではないため、インタビューをするにあたって、「対話的構築主義アプローチ」を意識してはいなかった。しかしインタビューが終わり、資料を整理して検討する段階で、本研究のインタビュー方法が「対話構築主義アプローチ」に近接していることが明らかとなった。

(2) 朝鮮人は植民地朝鮮でどのような状況下に置かれていたのか

「満州国」及び旧植民地における高齢日本語話者へのインタビュー(3) 日本語・日本文

化の記憶に関する報告」(『国語国文学報』第 80 号、2022 年)において報告した内容の一部を記す。

高齢日本語話者は、インタビューに応じて次のように述べている。

1932 年生まれ。私は、朝鮮生まれです。1945 年 8 月 15 日のときに、私は小学校 6 年生でした。中国では解放前と言いますが、小学校 3 年生ときに、(満州の)日本語学校にきました。延辺の、傑満洞小学校に入学し、5 年生まで通いました。6 年生のときに、引っ越して春陽というところに行きました。(満州)は、執筆者が補足した)

高齢日本語話者は、1930 年代の植民地朝鮮で幼少期を過ごしたことがわかる。同時代の状況について、主に『朝鮮年鑑』の昭和 15 年度(1940 年度)版から確認しておきたい。本書に収められている「道知事会議」における「総督訓示」(南次郎)の「道知事」への「訓示」には以下のように記されている。

内鮮一体の目標は半島人をして忠良なる皇国臣民たらしむるにある。忠良なる皇国臣民の本質は天皇中心主義の下に万民輔翼の皇道を尽すにある。「内鮮一体の真意強化」)

朝鮮人を皇国臣民とすることが述べられている。しかし同化は簡単なことではない。南次郎は次のような認識を示す。

聞く所に依れば半島同胞中の一部には内鮮一体は国家的社会的待遇を全面的に即時又は急進的に平等化するを以て前提条件となすが如き見解を抱懐する者無きにあらずと、又内地人の一部には之に依つて先達者たるの優位を喪失し、有害無益なる自卑に墮するものなりとなすが如き見解を抱懐する者無きにあらずと

同化は日本人が特権を失い、朝鮮人の待遇が向上することを意味していた。南次郎の「訓示」は、このような「半島同胞」「内地人」の差異が消失する地点を次のように示唆する。

国民精神即ち日本精神即ち皇室中心主義に基く万民輔翼の皇道精神は我が国民独特の大精神にして万代渝りなき莊嚴にして崇美なる国体に根ざす。此の根本思想を理解せずして今次聖戦の真義を把握することは出来得ないのであります。

朝鮮総督の「訓示」は、「形而上学」へと飛躍し、「東洋」の「新文化体系」の「顕揚」を謳う。「皇道精神」に基づく「東洋」の「新文化」の地平において、「半島同胞」と「内地人」の差異は消失すると言うことであろう。このように朝鮮総督によって「宣揚」される「東洋」の物語が、足下の現実的な「半島同胞」と「内地人」の格差によって揺さぶられている。だからこそ、南次郎は言及せざるを得なかったのではないだろうか。皇民化政策を急ぐ朝鮮総督府の統治は、矛盾を内包していた。高齢日本語話者は、そのような状況下で暮らしていたのである。

(3) 朝鮮人は植民地朝鮮においてどのような教育を受け、満州国ではどのような教育を受けたのか。

「満州国」及び旧植民地における高齢日本語話者へのインタビュー(4) 日本語・日本文化の記憶に関する報告」(『国語国文学報』第 81 号、2023 年)において報告した内容の一部を記す。

水野直樹「皇国臣民ノ誓詞」と「皇国臣民之柱」についての考察」(『朝鮮史研究会会報』168 号)では、「皇国臣民ノ誓詞」について「戦時期の朝鮮で「皇国臣民」の精神を植えつけるために唱えさせたもの」として、制定の過程について次のように述べている。

「誓詞」が制定されたのは、日中戦争勃発から三ヵ月後の一九三七年一〇月初めである。小学生用と中学生以上一般用の二種類があり、一般用は、「我等八皇国臣民ナリ 忠誠以テ君国ニ報ゼン」「我等皇国臣民ハ 互ニ信愛協力シ 以テ団結ヲ固クセン」「我等皇国臣民ハ忍苦鍛錬カラ養ヒ 以テ皇道ヲ宣揚セン」というものであった。

加えて、水野は「皇国臣民ノ誓詞」は、「朝鮮総督府学務局社会教育課(課長・金大羽)」、「学務局長塩原時三郎」、朝鮮総督南次郎の「ラインで作成されたと考えるのが妥当であろう」とする。「皇国臣民ノ誓詞」は、植民地朝鮮の政権の中枢に位置する人物たちによって作成されたのであり、皇民化教育を推し進める統治主体の思想がそのまま反映されたものとなっている。

この点に関連して示唆的であるのは、次のような高齢日本語話者の回想である。

修身科という科目がありました。日本の大和魂、精神を教育する科目です。一徳一心とか。朕惟うに我が皇祖皇宗国を肇むること宏遠に徳を樹つこと深厚なり・・・全部覚ええました。皇国臣民の誓いというもの。これらは学生たちが全部覚えなければならなかった。

運動場に全員集まって、東に向きなさい、天皇陛下に対して最敬礼と言っています。

(満州国の皇帝は溥儀です。では溥儀ではなくて、日本の天皇だったんですね。)
溥儀の事は知らなかった。日本からの解放後に知った。(括弧内はインタビューアー(奥田)以下同様)

高齢日本語話者の回想によれば、小学校の「修身科」において、「教育勅語」と「皇国臣民ノ誓詞」が教育されていたことになる。恐らく、朝鮮人児童が植民朝鮮で受けた皇民化教育は、満州国においても継続されていたと考えることができる。

(4) 朝鮮人は満州国でどのような暮らしを行っていたのか

「満州国」及び旧植民地における高齢日本語話者へのインタビュー(2) 日本語・日本文化の記憶に関する報告」(『愛知教育大学大学院国語研究』第29号、2021年)、「満州国」及び旧植民地における高齢日本語話者へのインタビュー(4) 日本語・日本文化の記憶に関する報告」において報告した内容の一部を記す。

高齢日本語話者は、以下のように生年月日と出身地の住所を書き記した。

1932年.2.23

朝鮮咸鏡北道穩城郡永忠面永達洞

上記の住所について、朝鮮総督府編『朝鮮國勢調査速報 昭和十年 世帯及人口』で確認した点について報告する。本書から、高齢日本語話者の出生地である「朝鮮咸鏡北道穩城郡永忠面永達洞」の「世帯及人口」の状況について確認することができる。この表による限り、「永忠面」は人口2,870人の比較的規模の小さい集落であったと思われる。

時代はやや遡ることになるが、「穩城郡」出身の人物の一人に呉成崙がいる。呉成崙については水野直樹「呉成崙」(『朝鮮民族運動誌研究』7号)に詳しい。水野は次のように述べている。

呉成崙は、ニム・ウェールズ、キム・サン著『アリランの歌』に登場する人物で、朝鮮の民族解放運動史、共産主義運動史においてきわめて重要な役割を果たしたが、その経歴はあまり詳しく知られておらず、北朝鮮あるいは中国の歴史書ではほとんど無視されている。

呉成崙は、朝鮮の民族解放、共産主義運動に深く関与した活動家であった。しかし、水野によれば、呉成崙は日本軍に協力することになる。

太平洋戦争の期間、呉は満州国治安部顧問となって日本に協力したといわれる。日本軍は彼に「山本秀雄」という日本名を与え熱河省警務庁警尉補の職に就かせた。

また、水野は呉成崙の出生地、満州への移住について以下のように報告している。

一八九八年、咸鏡北道穩城郡永瓦面龍南洞二三一。一九〇六年、父とともに間島移住、幼年時代を和龍県月晴郷傑満洞で過ごしたというが、一九三〇年代の日本側資料では、住居を「吉林省琿春県首善郷一松亭」としている。(朝鮮総督府警務局『国外ニ於ケル容疑朝鮮人名簿』一九三四年、一三四頁)

仮に、呉成崙の間島での居住地が「傑満洞」であるとすると、高齢日本語話者のものと一致する。推測に過ぎないが、「穩城郡」の朝鮮人の移住先が、同郷人の居る「傑満洞」に集中する傾向があったのではないだろうか。

最後に、他の朝鮮人高齢日本語話者のインタビュー内容の一部を掲載し、これまで検討してきた高齢日本語話者のインタビュー内容と比較検討しておきたい。

(覚えていることはありますか?)

一週間に一回土曜日は、日本語の昔話の時間がありました。昔々あるところに、おじいさんとおばあさんが、いました。

北海道から来た、日本人開拓団の人々がいました。日本人学校があり、日本人村には行くことができなかった。日本学校も、日本人村にありました。朝鮮人や中国人は行くことはできなかった。日本人の子供と話すことはなかった。天長節や明治節には神社に行って会うこと

はあったが、話をするとはなかった。

毎朝、まず東京に向けて最敬礼、つぎに新京に向けて最敬礼した。

先の高齢日本語話者の回想と比較して明らかに異なるのは、直接的ではないにしても、日本人児童との接触があったことである。

日本人児童との接触は、皇民化教育の現れとして捉えられる。朝鮮人児童には、「天長節や明治節」という天皇制下の時間意識を内面化することが求められ、「神社」という場で日本人児童と出会う。「神社」で朝鮮人児童が目当たりするのは、皇国臣民を生きる日本人児童の姿であった。このような光景が示唆しているのは、満州国における朝鮮人移民は、満州国民ではなく、皇国臣民として位置づけられていたことである。

本研究を整理する段階で視野に入った研究は、アラン・コルバン『記録を残さなかった男の歴史』(2011)である。コルバンは、過去に存在していたピナゴという一人の木靴職人について記述し、その人について知ろうとする。私も、インタビューを通して、図らずも植民地朝鮮から満州国へと移住した一人の朝鮮人について知ろうとした。

ただし留意しなければならないのは、本研究の試みが、インタビューを通してその人の過去について知ろうとしている事である。残された歴史的な史料から過去を再構成することと、インタビューを基にして過去について知ろうとすることは、全く異なると言わざるを得ない。

加えて、私が日本人であり、歴史的に見れば、言わば統治側の民族に属している事も無視し得ない。私は、高齢日本語話者の記憶を手掛かりとして、時代を再構成する資格があるのであろうかという問いを、終始一貫して抱いていた。本研究が、そのような問いを孕んだ試みであった点を、最後に言い添えておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 奥田浩司	4. 巻 81
2. 論文標題 「満州国」及び旧植民地における高齢日本語話者へのインタビュー（4） 日本語・日本文化の記憶に関する報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国語国文学報	6. 最初と最後の頁 63-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 奥田浩司	4. 巻 80
2. 論文標題 「満州国」及び旧植民地における高齢日本語話者へのインタビュー（3）-日本語・日本文化の記憶に関する報告-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語国文学報	6. 最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 奥田浩司	4. 巻 29
2. 論文標題 「満州国」及び旧植民地における高齢日本語話者へのインタビュー（2）-日本語・日本文化の記憶に関する報告-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛知教育大学国語研究	6. 最初と最後の頁 86-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 奥田浩司	4. 巻 27
2. 論文標題 「満州国」及び旧植民地における高齢日本語話者へのインタビュー（1）-日本語・日本文化の記憶に関する報告-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 愛知教育大大学院国語研究	6. 最初と最後の頁 5-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 奥田浩司
2. 発表標題 高齢日本語話者へのインタビューについて 日本語経験の戦後史
3. 学会等名 第六回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	米村 みゆき (YONEMURA MIYUKI) (80351758)	専修大学・文学部・教授 (32634)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------